

J・A・コメンスキー

T・G・マサリクの講演から(2)

大梶 優子



「コメンスキーは、歴史を人類のための学校と考え、その発展の段階を注意深く分析しています。主には、チェコにおけるキリスト教についてですが、民族の没落についても非常にいいねいに分析し、考察しました。その功績は驚くべきものです。文化史上、当時のチェコ、ポーランド、ハンガリーの状態を知る資料で、コメンスキーにまさるものはないといわれるほどです。歴史家は、コメンスキーから非常に多くのものを得ているといえます。チェコ民族は、よりよいものを希求して没落した、

ポーランドもまた、中庸な立場に戻らなければ、長くかからず解体するだろうというコメンスキーの分析、予見は、当を得ています。フランス革命を予見したことで、ライプニッツが評価されているように、コメンスキーは、ポーランド解体の予告で評価されるべきでしょう。コメンスキーは、また、『幸福な民族』という作品をハンガリー民族に献げていますが、彼の見解は、今日においても高く評価されています。彼は、当時のハンガリー王国の弱点を詳細に研究しました。そして、民族の

幸福は、道徳的な基盤の上に生まれると述べました。その時、勿論ハンガリー民族の上に自分の民族を重ねて考えていました。コムンスキーは、道徳を上から与えられる徳目としては考えず、様々な社会活動として具体的に示しました。民族が誠実であるように、そのためには、自分で自分を解き放つように、団結して血統性を守るようにしていくことが大切であること、また、民族は、自分達に根付いた自分達の政府をもつように、血縁関係にある人々との結び付きを強めるようにとも願いました。民族の幸福とは、あらゆる人々の自由、家庭の安泰、目標において一致した考えのもとに、どの人も障害なく自分の仕事に専念できることを意味すると考えました。これらの考えの上に、コムンスキーは、自分なりの教授法、教育学をうちたてました。ここでは簡単に、その主な原則だけをとりあげましょう。コムンスキーが、客観的な事物界に汎知的な方法を確立するよう努力したことを思い出してください。全ての教育は、汎知法を最後まで使いこなすことに他ならないと考えました。人間精

神は、汎知の方法で学習していきます。教育者に期待されることは、客観的事物界をより広く、より深い世界へと導き、だんだんに精神活動の内的な世界へと進めていくことです。私達現代人は、自己について考えるというところから出発しようとして、その意味では主観的ですが、コムンスキーは客観的事物界を優先させました。コムンスキーは、事実主義者であったともいえます。それに、スコラ学派と対立する立場をとりました。言葉よりも事物、言葉よりも事物についての考えを重視しました。教育の世界で、自然界の事物、事象を見よう、自然を知ろうとする考えは、それ以前にはなかったことです。後になって、ルソーがそのテーマをとりあげています。コムンスキーのすべての学術研究、教育学研究は、この自然な生き方、考え方にたどり着きます。そこに、コムンスキーの教育的現実主義、事実主義が成立しています。言葉ではなく事実が学校で与えられ、自然科学的な、数学的な知力が学校で育成されることを目指していますし、これが、後に一般教養、産業、工科のそれぞれ

の学校が独立して成立する方向を示唆しています。スコラ学派に対して、かなり明確な意図をもって、耳による記憶ではなく、目による視覚教育を要求しています。

『世界絵図』は、この教育理念を基礎にして、自然界の事物を収集した最初の教材です。事物とその意味は言葉に先立ち、事物を伴う言葉が最初に与えられるべきだという考えが反映されています。

まさに正しい教育が、人を本当の人間にします。それ故、人はその人生の最初から教育されるべきです。人の一生が、自分で学習する過程であり、人から教育される過程です。人は、子宮の中ですでに教育されるべきです。幼児から老人へ向かう、その幼児の時から、その人の一生は、教育の段階を経ていく人生以外の何ものでもないといても大げさではありません。保育と教育は、なにか特別のもので区別できるというものではありません。人は、自分の中に新しいものを付けたすこととはできません。ただ教育によって、私達の各々に用意されている自然体を成熟させ、開花させ得るだけです。保育と教

育は、事物界の秩序と、人間内に未発達な状態で置かれている能力に目を向けていきます。教師は、生徒の関心が世界の秩序とどの人にもある自分の能力に向かうよう教え導くべきです。コメンスキーの考えを一言でいえば、自学自習です。ですから、コメンスキーに依れば、教師は自らひたすら学び続けなければなりません。また、学校や人生はだれもがだれからでも学べる『学びの場』です。つまり、これは、学校のより水準の高い生徒は、教師の役を得るといふ彼の試みと関連しています。汎知学の概念の発展段階をかえて充実させるわけです。

教育は、一般性から特殊性へと進むべきだとコメンスキーは考えています。勉学のより高い段階では、特別新しいものは何も与えられません。より低い段階で大まかに与えられたものをもっと明確に詳しくするだけです。たとえば、画家が最初に顔全体の輪郭を描き、それから部分を詳しくいねいにしていくようなものです。同様に、教師や保育者もはじめは全体をおおまかに与え、子どもがそれを自分のものにしてから、順次詳しく明確に

していくというステップで進めます。

学校は生徒から離れた場となつてはなりません。学校は、国の、あるいは社会組織の基礎となるものです。学校は、いわば国です。町村の学校においても同じことがいえます。幼児のためには幼稚園が、学童には基礎学校（小中学校）、青年には都市のギムナジウム（高校）、最後にはアカデミー（大学）が必要です。大学は、県や国の管轄です。このように学校組織は、国の政治区分と対応します。学校は政府が世話をするようにとコモンスキーは述べています。教会ばかりだけでなく、国も学校教育に目を向けるべきというのです。ここにも、コモンスキーのモダンな考えがみられます。六歳までの子どもは幼稚園で、六歳から十二歳までの子どもは町村立の学校で、男女一緒に、家庭の状態や各人の才能にかかわらずなく教育がうけられ、さらに十二歳から十八歳まではラテン語学校、十八歳から二十四歳まではアカデミーで勉強できるような構想です。また、学校教育を充実させるために、コモンスキーは旅行を勧めています。これも

大切な教育の一つと考えているのです。これに加えて、体育のことも忘れていません。

もしもコモンスキーの学校教育についての考えを一つの文でまとめるとすれば、こう言えます。すべての人々は、それぞれ一つの方法で学ぶべきです。そこには、理論では汎知学、実践では汎教育が織り込まれています。ですからコモンスキーは、言うなれば、人民全体の教育を考え、保育・教育を民主化したのです。当時、教育をうけたのは貴族の子弟だけであり、一般庶民の子弟は例外的であったという事実は忘れられません。女の子の教育も、基礎から高等教育までを要望しています。あらゆる人々が、同じ方法で学習し、科学を進め広げる近代人となるように要望しています。彼自身、八歳の男の子に形而上学の真実在の諸規定を教える試みをしました。その基礎にあるのは、母国語による学習です。世界共通語としてのラテン語は、より高い段階でのみ学習されるべきとされています。

これらが、コモンスキーの哲学の主な理念といえます。

す。さらに、私は簡単にコメンスキーの歴史的な意義について、コメンスキー自身がどのように自らを啓発していったかをお話したいと思います。

彼の哲学の中で、主に、何よりも優先させて目が向けられているのは、チェコ同胞団の意見です。当時は、民族改革に力を入れていました。その他に彼の哲学を發展させた思想家達がいいます。最も敬意を表して自ら名を挙げているのは、アンドレアエ、さらにアルシュタット、ラトゥケです、ルターやメランプトンの足跡にも関心を向けています。新しい時代の哲学からも影響をうけました。ペーコンから多くを学び受け入れました。自由な思想家達をも恐れることがありませんでした。

同じように簡単にコメンスキーが歴史にどう貢献したかについてふれておきます。最初から彼の影響は大きいものでした。最初は狭い範囲でしたが、国から国へと追われる度に、その影響を及ぼす範囲が広がり、特に当時教育水準の高い世界全体にまでになりました。ライプニッツは、コメンスキーを非常に高く評価しました。その

ことは、私が十分に保証できません。後になってコメンスキーがすっかり忘れ去られ、前世紀（十八世紀）になってようやく彼の考えを見つけたしました。ようやく私達の時代になって、特にチェコ民族のところでは教育省が先に立って彼の考えを広める努力をし、コメンスキーの影響力が強まってきました。コメンスキーの思想の中に、多くの近代的な学校教育に関する提言を見出します。一つのことだけを紹介しましょう。フレーベルの幼稚園が、彼の独自の発想か、それともコメンスキーの発想によるものかは論点になるところです。フレーベルの伝記作家ライネッケは、独自の発想としています。然し、私達にはそれに対抗する証人がいます。以前このカレル大学の教授であったレオンハーデイの著書に、幼児の保育についてコメンスキーが力をいれている旨、フレーベルに知らせたとあるからです。」

（ブラハ在住）

※ 一八九二年三月二十八日、コメンスキー生誕記念日、

カレル大学において、学生達に向けての講演より